

## <「内航船の日」記念イベント「海から届ける写真展@大黒湯」を終えて>

「内航船の日」の7月15日から31日まで、東京都墨田区の銭湯「大黒湯」のロビーで「海から届ける写真展」を開催し、おかげさまで第一回目の「内航船の日」を無事に終えることができました。応援ありがとうございました。

海上の船員から集まった写真は、並べてみるとそれぞれが一つひとつ個性的な作品となっていました。日ごろ「船員ってどんな人だろう?」「船員ってこうなんでしょ」と考えている陸の人も、この写真展へ行けば、「この船員さんの写真は面白い」「きれい」「迫力ある」「どんな気持ちなんだろう」と、「船員」と言っても色んな人がいるってことが伝わります。このことは本当にすごい事で、こんなふうに船員に対して親しみを持ってもらえる機会はなかなかありません。

一方で、個性的な船員たちが、共通の価値観で語れるものも本当はあります。それこそが「船員の正体」を指すものでありながら、なかなか理解されにくいものです。

自然の海と付き合っていく生活から合理的に育まれていく船員の感性は、本来は普遍的で分かりやすい価値観だったはずですが、発達する市民社会が生み出していく新たな生活文化の中で、互いの想いは次第に乖離していったのだと思います。

今でも海に出れば容易に育まれていくことになる大事な感性が、市民社会から忘れ去られていくことを心配して「海事思想」という言葉が生まれていったのかも知れません。

しかし、写真展の会場では大きな発見がありました。枝分かれしていった2つの文化は、いつでも「海」というテーマの中で出会う事ができるのです。「海」はやはりすごい。「海」にしかできない。「海」があってよかった。

色々な顔をした船員たちとの交流からでなければ届かない世界が「海から届ける写真展」の先にはありました。

また、銭湯には、老若男女、陸からも色々な人が集まります。現代においては非常に珍しい「現実のソーシャル空間」といえる銭湯で、海上の船員たちと陸の人とが繋がる写真展を開催できたことは本当に幸運なことでした。

銭湯のロビーに掲げられた海上物流現場の最前線。実は、海上の船員たちに写真の提供を呼びかけた時には、殺伐とした写真が並ぶかも知れないと思っていました。それもいいと思っていました。しかし、「厳しい海」も「穏やかな海」も、「鮮やかな海」も、様々な写真が並んでいるにも関わらず、ロビーの中は優しい色の空気に包まれました。それが、「船員の海」だからなのでしょう。

船員は、どれだけ厳しい海を思い知らされても、そのすべてを認めてしまえるだけの海の魅力に何度も励まされ、また海を渡ります。商船乗りの船員たちが陸の人に届けようとした海は、そんな「海」だったのです。

会場に置かれた「船員たちにひと声！ノート」。写真を見てくれた人が自由に書き込めるように設置しました。いくつかのコメントを紹介します。

「内航船という言葉をはじめて知りました」「航海安全で」「縁の下ならぬ海の上の力持ち！」「ぼくも海で働きたいなあ」「国内物流の益々の発展をお祈り申し上げます」「内航船の日、頑張ってください！」…

海運の現場から「船員」が陸に直接投げかけるイベントは、海運物流としっかりリンクしながら盛り上がっていることが分かりました。日々、陸を目指し航海し続けている船員たちにとっても、こんなに嬉しいことはありません。

今回が第一回目となった「内航船の日」。ある会社が自主的に開催しようと計画した記念イベントが、匿名者による妨害で中止に追い込まれるなど、残念な事件もありました。

しかし、もともとSNSを中心に盛り上がり制定された「内航船の日」には応援

する人たちが大勢いて、当日までには、みるみる膨れあがり、より勢いを増して  
ました。

写真展開催日、取材に一番で駆けつけてくれたメディアが共同通信社でした。記  
者が言いました。「それにしても、SNSでの内航船の日に関する投稿量、すごいです  
ね」。

記念日「内航船の日」は、制定した時からずっと、陸の多くの人たちからの応援  
で実現しているのです。

「内航船の日」を記事にしてくれたメディアは共同通信社の他にも確認できてい  
るだけで、海事プレス、日刊 CARGO、月刊内航海運、内航海運新聞。東京の写真展には、  
港湾荷役会社の社長さんや海事公益団体の会長さんなども来ていただきました。

大阪でも、旅するコンテナ「コンテナくん」を描く絵本作家で「内航船の日」の  
提唱者でもあるアーティスト 谷川夏樹さんが「内航船の日」記念の個展を開催し、  
そちらも大盛況の様子でした。

あらためて、陸から、海から、ありがとうございました。

来年からも7月15日(=ナイコー)の「内航船の日」をよろしく願いいたします。

そして、SNSや写真展で、陸の人と一緒に記念日を盛り上げてくれた海上にい  
る船員たち。こんなことができるのは、船員の仕事がいつでも市民社会の生活を意  
識した仕事だからでしょう。また、船員の皆さんが堂々と誇りをもって、真面目な  
仕事をしてきたからに違いありません。海運の現場に、こんな船員たちが船を動か  
していることを本当に嬉しく思います。

そして、陸の人と一緒に記念日を楽しめたことは、本当に、本当に、嬉しいこと  
でした。ありがとうございます。また来年！

平成28年8月8日

全日本内航船員の会 事務局 松見 準